

## ■第2回大台ヶ原自然再生推進計画調査・野生動物部会

◆日時 平成15年3月14日(金) 13:30~16:30

◆場所 奈良市 春日野荘 「天平の間」

◆出席者 委員4名(大井委員、日比委員が欠席)、関係機関  
環境省/吉井近畿地区自然保護事務所長 他

### ◆議事

大台ヶ原自然再生推進計画調査・野生動物調査について

- (1) 調査の目標と概要
- (2) 各動物分類群ごとの調査内容及び方法について
- (3) その他

### ◆議事概要

(欠席委員の意見紹介)

- ・写真やスケッチを含む、既存の資料の徹底的な収集・解析を望む。
- ・調査の経過や結果の公表には、多様な人々へ発信するように努力を望む。
- ・環境の評価として、枯損木・倒木等もハビタットとして重要。
- ・利用の影響についても検討してほしい。

#### (1) 調査の目標と概要

(調査の目標と概要について、資料1~3を用いて事務局が説明)

座長：前回の部会の時より調査の視点が整理され、二つの大きな柱が明確にされた。過去のデータがあるものに関しては同様の手法で調査を行い、どれだけ変化したかを把握する方法。現状でどのような場所にどのような動物が生息しているかという方法の二つに整理された。これは前回検討会の委員の指摘を踏まえたものであり、これで良いと思う。それに伴って、調査対象分類群も下層植生などマイクロな環境を反映すると考えられる分類群を中心として調査が行われることとなった。調査地域の選定では、過去に調査が行われた場所は選定するということを明文化しておいた方が良いのではないかと。

事務局：過去に調査が行われている場所は、比較のため調査を行うべきと考えている。

座長：森林生態系の構造と機能の回復について、「森林の回復と共に動物群集が回復することで、始めて生態系の機能が再生したと言うべき」という文章があるが、何を機能と呼ぶのかは結構難しい。単に群集の種構成が同じになったところで、それで回復したとは言いきれないところがある。機能の中で個体数やバイオマスまで考慮に入れると数十年、百年単位でものを考えなければならず、今の狙いとしては潜在的な動物相や植物相など、近似的なものを目標にせざるを得ない。当面は動物相や植物相の回復を目指し、長期的には健全な森林生態系の回復を目指すというようにした方が良いのではないかと。

健全な森林生態系はどのようなものかということは相当の議論が必要であろう。

委員：ある環境容量の中ではどのようなものが生息可能かは、おおよその想定できると思うが、植物相の回復と動物相の回復はおそらく一致しないのではないかと考えている。植物相がほぼ回復したとしても、動物相が完全に回復しないこともあることを考えておかないとならないと思う。

—倒木や枯損木の評価について—

座長：倒木等の存在については気にしているし、動物にとっても重要である。動物の調査をするときに、動物の視点から見た、植生調査・環境調査はせざるをえないであろう。動物の生息環境として重要な条件として注目すべきものは、各専門家に聞き込み調査をして頂きたい。そのような要素を組み込むことで上層木だけを見ていたのではわからない、動物相と環境の関連が明らかになるものと思う。

委員：倒木もさることながら枯損木もよく動物に利用されている。樹洞は鳥類、コウモリ、ムササビ、モモンガ等に巣穴としてよく利用されているし、苔むした枯れ木なども動物にとって良好な生息環境である。調査の中でそういった要素をどのように拾い上げるのが問題である。

事務局：森林再生手法検討部会と協力した上で、動物調査にとっての植生調査を改めて行う必要があると考えて、検討している。分類群ごとの調査地設定というのは資料 3-6 の区分にあるものを基本としたいが、指摘にあったような、枯損木や倒木のような環境要素についてはそれに特化した調査を、別途行うべきであろうかと思っている。

座長：調査地の選択には、時に専門家の意見を聞きながら調査地点の設定を行うなどしながら考えて欲しい。サンプリング地点の設定がたいへん重要で、結果に響いてくる。委員が協力することで、解決できることが多いかと思う。

—利用との関連について—

座長：踏みつけやドライブウェイの影響など人為の影響についても利用部会と関わる問題として、できるだけ調査したいと思う。

事務局：再生事業の枠組み全体の中での位置づけとして考慮し検討したい。

(2) 各動物分類群ごとの調査内容及び方法について

事務局：(資料 5-1~5-5 を用いて説明)

—哺乳類調査について—

委員：小型哺乳類の調査について、比較可能な 1969 年の小林・阿部の調査との対応で考えれば、トラップの設置はコドラートでなく、ラインで行った方がよい。

事務局：資料では各環境ごとの解析に使う手法を示しており、過去とのデータの比較を行う地点としては過去の手法と同じ地点、同じ手法で調査を行う予定である。1985 年に

野生生物研究センターで行った調査の場所でも調査を行う予定である。

座長：小型哺乳類の調査は非常に労力がかかるコドラートを常にやるのではなく、労力もかからず多くのトラップが設置できるラインを取り入れると良い。綿密なコドラートによる調査と、ファウナを簡単に捉えることのできる、ラインの調査を組み合わせればよいと思う。植生ごとに方形区を設定するとたいへんな労力となる。できないところではラインを一本でやるなど工夫が必要。

委員：コウモリでは1969年に調査を行ったときには、ドライブウェイの終点に防火帯として、林を切っていた特殊な環境ではコウモリが乱舞していた。しかし、今は木が成長し密生しており、同じ環境が存在しないので、過去との比較は困難と思う。コウモリの場合は過去の資料があるが、現在調査できる場所がない。

#### —鳥類調査について—

委員：鳥類に関しては将来に向けて群集がどのように変化していくかを環境ごとに見ていくのが、重要と思われるので、過去との比較はもちろんだが、環境ごとの現状把握と解析が重要だと思う。また、腐植層の量やその中の土壤動物の量がわかれば良いと思う。鳥の調査は出現種のチェックリストをつくるだけでは意味がなく、今回の調査は環境ごとに何がどれだけ繁殖しているかが重要である。また、真冬の大台にはほとんど冬鳥はいない。強いていえば冬鳥の調査は必要ないくらいではないかと思っている。冬鳥を見る労力を繁殖鳥類の把握に努めた方が環境をより把握できるのではないか。大台ヶ原で最初にソウシチョウを見てから、20年ほどになるが、その間にしっかりした調査がほとんどない。下層植生が回復するに連れてソウシチョウが増えてくるのではないかという心配もある。

#### —両生・爬虫類の調査について—

委員：調査の中心は爬虫類よりも両生類になるだろう。下層植生との関係を含めて考察した方がよいとは思うが、他の昆虫などの動物群に比べ、特徴的な部分は、水域から見ているという視点である。その上で下層植生区分を見て、他の調査分類群と一致させる地点を作ればと考えている。繁殖期と非繁殖期では随分確認方法も異なるため、調査時期の選定はその場所と調査対象によって決める必要がある。標高が高いため出現種数はかなり限られる上、力量を持った調査者でないとできないと言う問題点もある。

#### —昆虫類の調査について—

座長：ピットフォールトラップというのは定量化が容易で再現しやすい。今後の評価のためにも、データをしっかり取っておく必要がある。トガリネズミやジネズミ類などは、モグラ類がミミズを食べていてミミズの量に影響を受けるのに対し、これらの動物は昆虫類を捕食するので、地表性の昆虫の量と関連性があり、昆虫の調査の中では歩行

虫の調査には特に重点をおいてもらいたい。また、ピットフォールトラップで小型哺乳類が得られたり、ビーティングでコウモリが得られたりすることがあると思うが、昆虫の調査の中で得られるそういう情報も大事である。

### (3) その他

ー自然再生推進法の概要および大台ヶ原との関連ー

(環境省より、自然再生推進法の概要と現時点では大台ヶ原では、自然再生推進法の適用を受ける段階には至っていないと判断していることを説明)

ー来年度のスケジュール等ー

事務局：来年度は調査が主体になるが、結果がある程度出てきたところで、また検討会を開きご意見をいただきたいと考えている。

座長：他の部会との連携は、密に取っていけるように考えていって欲しいと思う。どの部会が、どこでどのような調査を行うのかという一覧があると良い。

環境省：各部会統一のそのような一覧を作って、お示しできるように準備したい。

(閉会)